

親の養育態度が子どもの社会的スキル、 学校適応感、および絶望感に及ぼす効果

—— 中学生を対象にした検討 ——

谷 口 弘 一

目 次

1. 問題と目的
2. 方法
 - (1) 調査対象者と手続き
 - (2) 調査内容
3. 結果
 - (1) 測定変数間の相関
 - (2) 潜在変数間の相関
 - (3) 因果モデルの検討
4. 考察

1. 問題と目的

谷口・田中(2004)は、小学生と高校生を対象にして、親の養育態度が児童・生徒の社会的スキル、学校適応感、および絶望感に及ぼす効果を説明する因果モデルを構築し、そのモデルの妥当性について検討を行った。また、因果モデルに含まれる各変数間の関連が、発達段階の異なる小学生と高校生によって、どのように異なるかを検討した。想定された因果モデルは、以下の通りであった (Figure 1)。

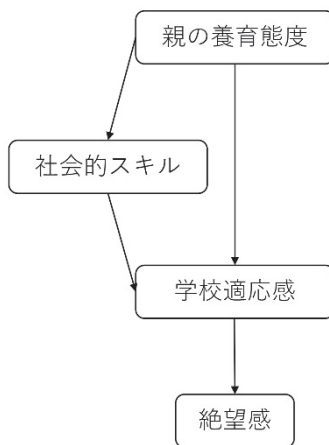


Figure 1 各変数間の関連を示した因果モデル

各変数の関連については、①親の養育態度が学校適応感に対して直接的な影響を与える (谷井・上地, 1994)、②社会的スキルが親の養育態度と学校適応感の関連を仲介する (戸ヶ崎・坂野, 1997)、③学校適応感が絶望感に影響を与える (Boivin, Poulin, & Vitaro, 1994) ことがそれぞれ予測された。

各変数間の関連の変化については、社会的スキルが、初期の親子関係における経験を通じて学習された行動 (Cartledge & Milburn, 1986; Gresham, 1986; 菊池, 1998; 鈴木・庄司, 1990) だけでなく、友人関係など新たな対人関係における経験を通じて学習された行動 (Duck, 1991; Miller & Sloane, 1976) も含むことから、学校適応感に対する社会的スキルの予測力は、小学生よりも高校生において、より大きくなることが予測された。すなわち、小学生では、親の養育態度が学校適応感に対して直接的かつ間接的な効果を持ち、高校生では、親の養育態度が学校適応感に対して社会的スキルを仲介した間接的な効果のみを持つことが予測された。

分析の結果、小学生においては、愛情に満ち、子供の自主性を育てるような母親の養育態度が、児童の学校適応感を高め、さらには絶望感を低めるという直接的な効果を持つことが確認された。それと同時に、望ましい母親の養育態度は、友だちに対する共感や積極的関わりといった子どもの社会的スキル行動の頻度を高めることを通じて、児童の学校適応感を高め、ひいては絶望感を低めるという間接的な効果を併せ持つことが見いだされた。一方、高校生においては、母親の養育態度が学校適応感や絶望感に対して直接的な効果を持っておらず、社会的スキルを仲介する間接的な効果のみを持つことが示された。

本研究では、中学生を対象として、親の養育態度が子どもの社会的スキル、学校適応感、および絶望

感に及ぼす効果を説明する因果モデルの妥当性について検討した。また、各変数間の関連が、小学生ならびに高校生の結果と比較して、どのように異なるかについても併せて検討した。

2. 方法

(1) 調査対象者と手続き

中学2・3年生312名（男子172名、女子139名、不明1名）が調査に参加した。各学級担任の先生が、ホームルームや放課後の時間を利用して調査を実施した。分析には、欠損値がない273名（男子150名、女子122名、不明1名）のデータを用いた。

(2) 調査内容

調査には、年齢、性別など人口統計学的変数を質問する項目に加えて、以下の尺度が含まれていた。

親の養育態度 Parker, Tupling, & Brown(1979)のthe Parental Bonding Instrumentから、因子負荷量を考慮して、ケア10項目、過保護10項目を選択し、日本語に翻訳して用いた。ケアは、親がどの程度優しく、思いやりがあるか、あるいはどの程度冷たく、怠惰であるかを示す。過保護は、親がどの程度侵襲的で、子ども扱いをするか、あるいはどの程度子どもの独立や自律性を許容するかを示す。調査参加者は、母親（または、祖母などの母親代わりになる人）の示す態度や行動が各項目に対してどの程度当てはまるかに基づいて評定を行った。回答は、“全く当てはまらない（1点）”から“非常に当てはまる（4点）”までの4件法であった。全ての項目に対して、因子数を2に固定した因子分析（最尤法、バリマックス回転）を行った。どの因子にも十分な因子負荷量（.40以上）を示さなかった項目や複数因子に高い因子負荷量を示した項目を除外しながら、複数回、因子分析を行った結果、最終的にケア8項目が第1因子に高い因子負荷量を示し、過保護4項目が第2因子に高い因子負荷量を示した。全分散の説明率は48.74%であった。因子ごとに、各項目の合計点を算出し、下位尺度得点とした。 α 係数は、ケアが.82、過保護が.72であった。

社会的スキル 庄司（1994）の児童用社会的スキル尺度から、因子負荷量を考慮して、共感・援助的スキル8項目、積極・主張的スキル7項目を選択し

た。調査参加者は、各項目が自分自身にどの程度当てはまるかについて、“全く当てはまらない（1点）”から“非常に当てはまる（4点）”までの4件法で評定を行った。全ての項目に対して、因子数を2に固定した因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。どの因子にも十分な因子負荷量（.40以上）を示さなかった項目や複数因子に高い因子負荷量を示した項目を除外しながら、複数回、因子分析を行った結果、最終的に共感・援助的スキル8項目と積極・主張的スキル1項目が第1因子に高い因子負荷量を示し、積極・主張的スキル4項目が第2因子に高い因子負荷量を示した。全分散の説明率は49.34%であった。因子ごとに、各項目の合計点を算出し、下位尺度得点とした。得点が高い者ほど、スキルを遂行する頻度が高いことを示す。 α 係数は、共感・援助的スキルが.86、積極・主張的スキルが.68であった。

学校適応感 高瀬・内藤・浅川・古川（1986）が作成した高校生用学校環境適応感尺度のうち、学習意欲、教師関係、友人関係、規則への態度の4下位尺度から、因子負荷量を考慮して、各6項目ずつ合計24項目を採用した。調査参加者は、学校での生活を振り返って、各項目が自分自身にどの程度当てはまるかについて、“全くそうでない（1点）”～“非常にそうだ（4点）”までの4件法で評定を行った。4つの下位尺度それぞれにおいて、各項目の合計点を算出し、尺度得点とした。得点が高いほど学校にうまく適応していることを示す。 α 係数は、学習意欲が.82、教師関係が.81、友人関係が.78、規則への態度が.83であった。

絶望感 桜井（1989）によって作成された17項目からなる児童用絶望感尺度を用いた。回答は、“はい（1点）”または“いいえ（0点）”の2件法であった。得点には各項目の合計点を用いた。得点が高いほど絶望感が高いことを示す。 α 係数は.73であった。

3. 結果

(1) 測定変数間の相関

測定変数間の相関をTable 1に示す。ケアは、社会的スキルの2つの下位尺度（共感・援助的スキル： $r = .31, p < .01$; 積極・主張的スキル： $r = .29,$

Table 1 測定変数間の相関

	養育態度		社会的スキル		学校適応感			
	ケア	過保護	共感	積極	学習	教師	友人	規則
養育態度								
ケア	—							
過保護	-.29**	—						
社会的スキル								
共感・援助	.31**	-.11	—					
積極・主張	.29**	-.17**	.48**	—				
学校適応感								
学習意欲	.17**	-.07	.29**	.24**	—			
教師関係	.27**	-.10	.45**	.45**	.40**	—		
友人関係	.32**	-.11	.55**	.62**	.26**	.37**	—	
規則	.22**	-.05	.25**	.11	.47**	.42**	.04	—
絶望感	-.28**	.13*	-.27**	-.23**	-.29**	-.22**	-.33**	-.19**

注) $N = 273$. * $p < .05$, ** $p < .01$.

$p < .01$)、学校適応感の4つの下位尺度(学習意欲: $r = .17, p < .01$; 教師関係: $r = .27, p < .01$; 友人関係: $r = .32, p < .01$; 規則: $r = .22, p < .01$)とそれぞれ有意な正の相関、また、絶望感と有意な負の相関があった($r = -.28, p < .01$)。一方、過保護は、社会的スキルの積極・主張的スキル($r = -.17, p < .01$)と有意な負の相関、また、絶望感と有意な正の相関があった($r = .13, p < .05$)。共感・援助的スキルは、学校適応感の4つの下位尺度と正の相関(学習意欲: $r = .29, p < .01$; 教師関係: $r = .45, p < .01$; 友人関係: $r = .55, p < .01$; 規則: $r = .25, p < .01$)また、絶望感と負の相関があった($r = -.27, p < .01$)。積極・主張的スキルは、学校適応感の3つの下位尺度と正の相関(学習意欲: $r = .24, p < .01$; 教師関係: $r = .45, p < .01$; 友人関係: $r = .62, p < .01$)、また、絶望感と負の相関があった($r = -.23, p < .01$)。学校適応感の4つの下位尺度は、絶望感と有意な負の相関があった(学習意欲: $r = -.29, p < .01$; 教師関係: $r = -.22, p < .01$; 友人関係: $r = -.33, p < .01$; 規則: $r = -.19, p < .01$)。

(2) 潜在変数間の相関

潜在変数間の相関をTable 2に示す。親の養育態度は社会的スキルおよび学校適応感と正の相関を示し(社会的スキル: $r = .52$; 学校適応感: $r = .52$)、絶望感と負の相関を示した($r = -.26$)。社会的スキルは学校適応感と正の相関を示し($r = .97$)、絶望感と負の相関を示した($r = -.49$)。学校適応感

Table 2 潜在変数間の相関

	養育態度	社会的スキル	学校適応感
社会的スキル	.52		
学校適応感	.52	.97	
絶望感	-.26	-.49	-.51

注) $N = 273$.

望感と負の相関を示した($r = -.51$)。

(3) 因果モデルの検討

共分散構造分析の結果、親の養育態度から学校適応感へ向かうパスは有意ではなかった。その他のパスは全て有意であった(Figure 2)。親の養育態度から社会的スキルへのパスは正の係数であり($\beta = .52, Z = 2.68, p < .01$)、母親を暖かく、支配的でないと認知している子どもほど、共感・援助的スキルや積極・主張的スキルが高かった。また、社会的スキルから学校適応感へのパスも正の係数を示しており($\beta = .96, Z = 5.00, p < .01$)、共感・援助的スキルや積極・主張的スキルが高い子どもほど、学校適応感が高かった。さらに、学校適応感から絶望感へのパスは負の係数であり($\beta = -.51, Z = -4.97, p < .01$)、学校適応感が高い子どもほど、絶望感の程度が低かった。これらの結果から、中学生においては、母親の養育態度が学校適応感や絶望感に対して直接的な効果を持っておらず、社会的スキルを仲介する間接的な効果のみを持つことが示された。

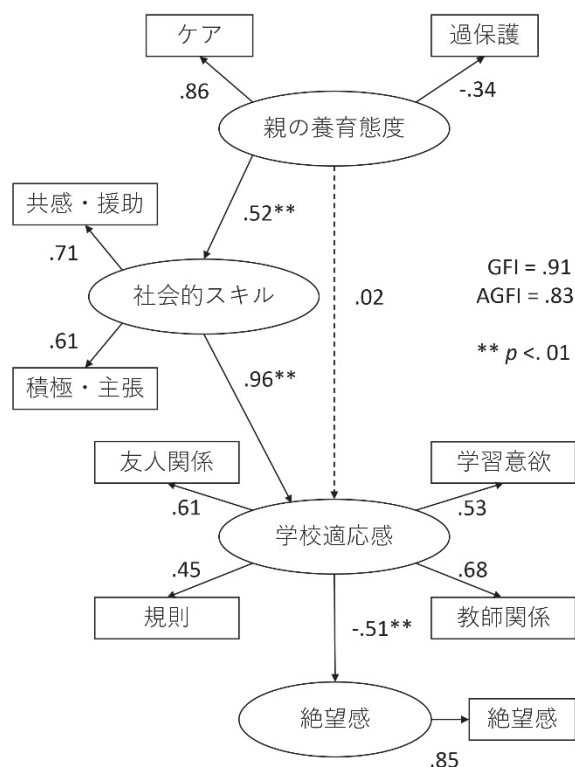


Figure 2 共分散構造分析の結果

4. 考察

本研究の目的は、中学生を対象として、親の養育態度が子どもの社会的スキル、学校適応感、および絶望感に及ぼす効果を説明する因果モデルの妥当性について検討することであった。また、各変数間の関連が、小学生ならびに高校生の結果と比較して、どのように異なるかについても併せて検討を行った。分析の結果、中学生においては、親の養育態度が学校適応感や絶望感に対して社会的スキルを仲介した間接的な影響のみを持っていた。

谷口・田中(2004)では、小学生においては、親の養育態度が学校適応感や絶望感に対して直接的な影響を与えると同時に、社会的スキルを仲介して間接的な影響を与えていた。一方、高校生においては、親の養育態度の学校適応感や絶望感に対する直接的な影響は認められず、社会的スキルを仲介した間接的な影響のみが確認された。こうした結果は、社会的スキルの仲介効果が、小学生では部分仲介、高校生では完全仲介であることを示しており、中学生においても、社会的スキルは完全仲介効果を持つことが示された。

初期の親子関係を反映した社会的スキルは後の新

しい対人関係での経験に基づいて修正される(Duck, 1991)。実際、児童期から青年期への発達、さらには友人関係の進展に伴って、友人関係におけるサポートのやりとりは、親の養育態度や初期の親子関係をもとに形成される内的ワーキングモデルよりも、子ども自身の社会的スキルや友人関係に対する認知から強い影響を受けるようになる(Taniguchi, 2006, 2012; Taniguchi & Ura, 2001)。こうした要因に加えて、児童期から青年期にかけては、対人関係の中心が親子関係から友人関係へと移行することから(長沼・落合, 1998)、発達に伴い、親の養育態度よりも子どもの社会的スキルの方が、子ども自身の学校適応感や絶望感に対して、より重要な役割を果たすようになると思われる。

引用文献

- Boivin, M., Poulin, F., & Vitaro, F. (1994). Depressive mood and peer reject in childhood. *Development and Psychopathology, 6*, 483-498.
- Cartledge, G. & Milburn, J. F. (Eds.) (1986). *Teaching social skills to children* (2nd ed.). New York: Pergamon Press.
- Duck, S. (1991). *Friends, for life: The psychology of personal relationship* (2nd ed.). London: Harvester Wheatsheaf.
- Gresham, F. M. (1986). Conceptual and definitional issues in the assessment of children's social skills: Implications for classification and training. *Journal of Clinical Child Psychology, 15*, 3-15.
- 菊池章夫(1998). また思いやりを科学する——向社会的行動の心理とスキル—— 川島書店
- Miller, S. J. & Sloane, H. N. Jr. (1976). The generalization effects of parent training across stimulus settings. *Journal of Applied Behavior Analysis, 9*, 355-370.
- 長沼恭子・落合良行(1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- Parker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979). A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology, 52*, 1-10.
- 桜井茂男(1989). 児童の絶望感と原因帰属との関係 心理学研究, 60, 304-311.
- 庄司一子(1994). 子どもの社会的スキル 菊池章夫・堀毛一也(編) 社会的スキルの心理学——100のリストとその理論—— (pp. 201-218) 川島書店
- 鈴木聡志・庄司一子(1990). 子どもの社会的スキルの内容について 教育相談研究, 28, 24-32.
- 高瀬克義・内藤勇次・浅川潔司・古川雅文(1986). 青年期

- の環境移行と適応過程 (1) 日本教育心理学会第28回大会発表論文集, 556-557.
- Taniguchi, H. (2006). A longitudinal study on the influence of parents' child rearing attitudes and students' specific support expectations on support exchange in friendships among students. *Doshisha Psychological Review*, *52*, 6-15.
- Taniguchi, H. (2012). The links between parents' child rearing attitudes, children's social skills, and support giving and receiving in friendships among junior high school students. *Bulletin of Center for Education Research and Training*, *11*, 99-105.
- Taniguchi, H. & Ura, M. (2001). The links between parents' child rearing attitudes, children's social skills, and support giving and support receiving in friendships among children. *Japanese Journal of Social Psychology*, *17*, 12-21.
- 谷口弘一・田中宏二 (2004). 親の養育態度が児童・生徒の社会的スキル, 学校適応感, および絶望感に及ぼす効果 岡山大学教育学部研究集録, *127*, 21-27.
- 谷井淳一・上地安昭 (1994). 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, *42*, 185-192.
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1997). 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応に及ぼす影響——積極的拒否型の養育態度の観点から—— 教育心理学研究, *45*, 173-182.